

オラン・アスリを対象とした現地調査について (マレーシア留学・現地調査案内 2)

著者	信田 敏宏
雑誌名	日本マレーシア研究会会報
巻	33
ページ	8-11
発行年	2005-12-26
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005834

オラン・アスリを対象とした現地調査について

信田敏宏*

特集担当の篠崎香織氏より「オラン・アスリ」を対象とした現地調査案内について執筆依頼を受けた。オラン・アスリはマレー半島の先住民族である。以下では、私自身の調査経験に基づき、オラン・アスリを対象とした現地調査について簡単に整理してみる。

1. 調査許可証の取得

他のテーマと同様に、オラン・アスリに関しても、マレーシア政府から調査許可証を取得する必要がある。調査が長期間に及ぶ場合には、プロフェッショナル・パスなどを取得する必要も出てくる。この点に関しては、前号(第 32 号)で篠崎氏(pp.12-13)が整理しているので、そちらを参照されたい。以下では、若干の注意点を述べる。

申請書の「照会機関」を記入する欄には、オラン・アスリ局(Jabatan Hal Ehwal Orang Asli)と記入するのが通例である。また、研究計画書に調査地を具体的に書いている場合には、州政府も「照会機関」になるようである。これまでの事例では、ペラ州やパハン州で申請が拒否されたことがある。拒否の理由は、研究計画の内容というよりも、当時、オラン・アスリに関して森林伐採や開発などのセンシティブな問題が生じていたためであるようだ。ちなみに私は、具体的な調査地を研究計画書には記入しない。

2. 公文書館・図書館・統計局

EPU の調査許可証があれば国立公文書館での文献調査が可能となる。国立公文書館にはオラン・アスリ関係の資料が少なからず存在している。「オラン・アスリ局」ファイルのなかには大学図書館でも手に入る資料が存在するので、わざわざ国立公文書館まで行く必要はないのかもしれない。しかし、例えば「森林局」ファイルのなかにはイギリス植民地期における森とオラン・アスリ関係を探る上で興味深い資料が存在している。

国立公文書館では、オラン・アスリ関係の資料やファイルがまとまって整理されているわけではなかったので、私の場合、調査地のあるヌグリスンピラン州に関する資料をすべてチェックするという作業を行なった。現地調査を実施する前よりも資料の内容を理解しやすいと考え、村での現地調査がほぼ終了してから約 1 ヶ月にわたりこの作業を実施した。

クアラランプール近郊のスランゴール州ゴンバックにはオラン・アスリ局が運営しているオラン・アスリ博物館があり、図書室が併設されている。この図書室にはオラン・アスリ関係の行政資料が存在している。ちなみに、この地域はオラン・アスリの人びとが集住しており、オラン・アスリ専門の病院もある。

また、マラヤ大学、マレーシア国民大学、マレ

ーシア理科大学などの大学の図書館では、例えば、オラン・アスリに関する修士・博士論文、学士論文などを閲覧することができる(場合によってはコピーもできる)。

その他、統計資料は統計局に存在する。1997年にはオラン・アスリに関する統計資料が統計局から発行されている。

3. オラン・アスリ局

マレーシア政府の EPU からの調査許可証があれば、「照会機関」であるオラン・アスリ局からの調査許可を得る必要はないと、私は考えている。ただし、最近ではオラン・アスリ局の HP (<http://www.jheoa.gov.my/>、上記のオラン・アスリ博物館の情報も掲載されている)がオープンしていて、そこから申請書をダウンロードして、ファックスで送るようになっている。申請書といっても、名前や住所などを記入するだけだが。

オラン・アスリ局は、国外の研究者に警戒心を抱いているため、調査に協力的ではない傾向がある。実際に、クアラルンプールにある本部では、私は何の情報も得ることができなかった。州の支部でも情報を得ることは難しく、県レベルの出張所で何とか情報を得ることはできたが、私はオラン・アスリ全体のデータを得たかったので、他の手段を取る必要に迫られた。

オラン・アスリ局は調査者にとってあまり利益のない行政機関であるが、調査地に赴き調査活動を開始する場合には、その存在の大きさを知るよ

うになる。長期の現地調査を実施する場合には、オラン・アスリの村に住む必要がある(住んだ方が良い)。村に住むにあたって、村長役のバティン(Batin)の許可を得ることになるのだが、多くのバティンはオラン・アスリ局からの許可が必要だと主張する。そこで、EPU の調査許可証を持って、県レベルのオラン・アスリ局の出張所に行き、村に住む許可を得るための交渉をすることになる。私の場合には、EPU の調査許可証よりも、マレーシア国民大学の指導教官が書いてくれた紹介状の方が役に立った。その後、私の下宿先に警察官がやってきたが、その時には、EPU の調査許可証とパスポートの提示を求められた。

4. 行政機関

県や州レベルの役所で行政資料の収集調査を試みたが、「オラン・アスリに関するデータはすべてオラン・アスリ局が管轄している」と役人に言われた。嘘をついているのではなく、本当にそうなのである。

オラン・アスリ局での行政資料の調査は、出張所レベルのオラン・アスリ局職員の能力とパーソナリティに大きく左右されるようだ。調査地を管轄する当時の出張所の職員はかなり杜撰な管理をしており、村の行政資料は、ひとつのファイルボックスに何もかもがすべて無造作に詰め込まれていた。ファイルの束を渡され、「必要なところをメモしろ」と言われたが、「時間がかかるのですべてコピーをとってよいか」と試しに言ってみたとこ、意外に「いいよ」と言われた。

* 国立民族学博物館民族学研究開発センター

村で調査を進めていくと、オラン・アスリ局以外にも村のデータが存在することを知ることになる。例えば、RISDA の出張所には村で実施されたゴム植え替えプロジェクトの資料があり、保健所では個々の世帯の情報を得ることができた。これらのデータは世帯調査によっても得ることは可能だが、相互に裏づけができる点で有益であった。

その一方で、データは存在していても閲覧することができない機関も多かった。警察署は村びとに関するデータを持っているようだったが閲覧不可能であり、森林局の出張所では森林産物に関する話しか聞くことができなかった。ちなみに、クアラルンプールにあるイスラーム・センター (Pusat Islam) にオラン・アスリ専門の宣教部局があるが、やはり具体的なデータを得ることはできなかった。また、イスラーム関連の調査では行政側からデータを得ることはできなかった。

その他、行政資料の取得方法として、村びとから直接、資料を見せてもらうという方法がある。例えば、役所からの通達文書など。これは意外に有効な方法だと思う。

5. 村での調査

村入りの際には、「養子儀礼」を受けた。おそらく、調査者の多くは、程度の差こそあれ、村びととの間に何らかの(擬似的な)親族関係を結んでいるにちがいない。問題は、どのような人びとと関係を結ぶかということなのだが、それは偶然に左右される場合が多いようである。それでも、ある程度様子を見て、信頼できる相手と関係を結ぶこと

がその後の調査生活を送る上では重要になる。

調査資金に余裕があるならば(場合によっては、余裕がなくても)調査助手を雇うのがよい。調査をスムーズに進める上でも、村で生活していく上でも、調査助手は不可欠な存在である。オラン・アスリの場合には、マレー系の学生などを調査助手に雇うのではなく、村で読み書きができる人を雇う方がよいと考える。私の場合、調査助手には月額 200 リンギットを支払った(本人はいらなうと言っていたが)。仕事がなくても、調査期間が終了するまで給料のように支払うことにした。

オラン・アスリの言語はマレー語とは異なるので、マレー語とは別に村で言葉の勉強をする必要が出てくる。特に、マレー半島中部や北部のグループを調査する場合には、彼らはマレー語とは言語系統が異なるモン・クメール語系の言葉を話すようなので、言語の習得は不可欠となる。英語で調査することは、現段階では、極めて難しい。長期調査を実施する場合には、最初の数ヶ月は言語の習得に集中した方がよい。

村での人間関係は、調査者を大いに悩ますことになる。調査者も人間であり、調査が長期間になればなるほど八方美人でいることに限界を感じるであろう。八方美人ではいられないと開き直れば、確かに苦手な人や敵もできるが、村での生活が少しは楽になるのかもしれない。また、調査生活は、自分の思うようにならないし、相手もこちらの思うように動いてはくれないが、「それが当たり前のこと」と思うようにすれば少しはイライラがなくなるかもしれない。

都市生活者にとって村での生活は難しいようで、最近では村での調査は敬遠されがちのようである。しかし、村でフィールドワークをする経験というのは、異文化の世界で人間的にも大きく成長できる可能性を秘めているものだと私は確信している。フィールドワークにはそのような秘儀的要素があり、フィールドワーカーはそうした秘密を語りたがらないものである。

6. その他

最近ではオラン・アスリを対象とする NGO 活動が活発であり、このルートから調査活動を進めていくという選択肢もある。マレーシアの大学に所属するオラン・アスリ研究者が少なくなってきたという事情もある。オラン・アスリの現状については、Colin Nicholas 氏(Center for Orang Asli

Concerns)がコミットメントの面から言っても、多くの情報を持っている。マラヤ大学には、自身がオラン・アスリである Juli Edo 博士がいる。さらに、オラン・アスリ研究者のメーリング・リスト (<http://groups.yahoo.com/group/orangasli/>) もあるので、そちらから最新の情報を得ることも可能である。

以上、雑駁な情報の提供となってしまったが、オラン・アスリを対象とする調査が他と比べて特殊であるというわけではない。確かに、マレーシアの貧困層でもあるオラン・アスリ社会での調査は大変で、ラポールを築くのに苦労はするが、それは他の人びとを対象にした調査でも同様のはずである。